を大きく上まわる 46 件の申し出があった．研究成果はすべてポスターセッションのかたちで発表された．

会はテープカットで始まり，世話人を代表して，宮崎教授（名古屋工業大学）が開会宣言を行い，支部長挨拶に引き続き，わざわざ本フォーラムのために遠路駆け付けて下さった日本鉄鋼協会会長森田教授（大阪大学）が協会本部の本フォーラムへ寄せる熱い期待を述べられた．学生 164 名，教官 55 名および企業側から 46 名の計 265 名が一堂に会する盛況であった．人いきれと熱気につつまれた雰囲気のもと活発な討論が 46 のポスターセッションの各テーブルに繰り広げられ，終わってみると 3 時間に及ぶ発表時間も不足ぎみに感じられるほどで，会の終了宣言後も会場のここかしこに討論の輪が残る有様であった．企画する世話人にとっても，発表する学生にとっても初体験であったため，当初かなりの混乱と戸惑いも予測されたのであるが，この初体験がかえって適度の緊張感を醸し出し，会を盛り上げる結果となった．

開会後まもなくしてはじまった激論の輪が，その数を増すにつれ，所定の目的は達成されたと安堵したしだいである．1 高専と 6 大学の 13 学科から寄せられた研究発表は材料の物性，加工，プロセスと多岐の内容にわたり，かつ，発表内容も学会等で十分発表できるものから未完成のものまで色とりどり見られた．また，発表者も学部生から大学院博士課程の院生と幅広く，研究内容の興味もさることながらその応答ぶりを楽しんでいる参加者も見受けられた．反省点・要望点としては，指導教官名を記載してほしい(発表は学生による材料フォーラムということで指導教官名は伏せられた.)，発表研究の分野の大きな流れとその中での位置づけを明確にすべき，等の声が企業側参加者から聞かれ，一方，発表に当たった学生からは，「この研究は何に使えるのか？」といった企業側からの近視眼的質問の数々に窮したとの声もあった．寄せられた声それぞれが現在の企業人，大学人の思考や関心の的を反映しており，企業と大学それぞれが社会で健全に機能している証拠と感じられた．

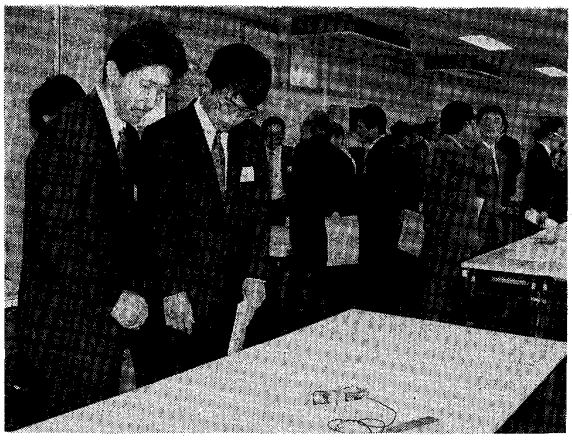

写真 2　フォーラム会場風景

閉会後，ビール会社直営店の大宴会場にて発表者の表彰が行われた．予定を急遽変更して最後まで残られることとなった森田会長をしてその挨拶の中で，発表内容は本部の講演大会にも匹敵するものが数多く見られ，かつ本フォーラムは支部活動のあり方に大きなエポックをなした，と言わせしめ，そして今後，全国にこのような形式の会の普及が期待されるとの絶賛のお言葉をいただいた．乾杯を待ちかねたように，準備された料理は 10 分もたたないうちにその大半が学生の胃袋に納まり，追加に次ぐ追加も焼け石に水，飲み放題のビールのみがかろうじてテーブルに残る有様であった．そのため有料で参加していただいた企業の方々には空腹とも相まって学生のヤングパワーを強烈に印象づける場となった．

本フォーラムは産業界と大学との情報交流の場として支部活動の活性化につながり，学生の研究意欲の高揚に資するところが大きいと実感しており，東海支部では本企画の継続を計る予定である．日本鉄鋼協会からは会長じきじきのご参加，日本金属学会からは表彰品の寄贈という望外の支援をいただきました．ここに両会本部の御好意に対し厚くお礼申し上げます．なお，本フォーラムが成功裡に終えることができた裏には名古屋工業大学材料系教室の学生諸君の絶大な手助けがあったことを付記し，謝意を表します．

北京のホテルでの朝食

大　谷　正　康
(株)神戸製鋼所常任顧問　工博

神戸製鋼所スラグ建材部　田部部長，鉄鋼技術研究所稲葉製銑室長とともに 6 月 24 日午前北京へ出発，約 4 時間のち北京首都空港に到着した．時差は 1 時間遅れであるが，夏時間採用のため実質時差はない．

入国，税関検査も問題なく北京事務所の清水所長，森本主任部員および張高級工程師らの出迎えを受け，張さんとは 1 年振りの再会を喜び合った．

並木の美しい道を通って Shangrila Hotel（北京香格里拉飯店）へ．

翌朝 7:15，ロビーで落ち合い朝食のため 1 階のレストランへ．入口でウェイトレスから「あなたがたはこれくらいの小片を持っているか」と手で示された．「持っていない」と答えると，「ここでは食事できない」との返事．そこで黄門様の印籠よろしく「これではどうか，確かに宿泊者だ」とキーについたルームナンバープレートを示したにもかかわらず，「だめだめ，あなた方は 2 階のレストランに行きなさい」といわれて大の男 3 人（1

人は小男？）急ぎ足で 2 階へ．そこはフランス料理専門店で，「われわれは中華料理を望んでいる」というと「それでは 1 階へ」と再び階下の別のレストランを探して入口へ．ところがそこは団体専用で「ここは駄目だ」とことわられた．気の毒に思ったのかボーイが案内してくれて再び最初のレストランへ．あの 3 人連れはあっちこっちとなんで急ぎ足に歩き廻っているのだろうかとの周囲の目が気にかかる．

田部部長が「これではどうか」とルームキーと一緒に渡されたルームナンバーを記入してあるカードを示したところ，ようやく席に案内された．

この間約 20 分の時が流れた！

言葉の通じない哀れさ．過去訪中時はいつも通訳役を兼ねた張先生がついてくれ，何のトラブルもなかったのがうらめしい．とにかく時間も無い上に十分な会話も難しいことから，中国粥定食を注文．「やれやれ！」

ちなみに中国粥定食 1 人あたり 30 元（1 元約 27 円），フランス料理 70 元，バイキング方式 48 元，いづれも 15% のサービス料が加算される．

Welcome
歓　迎
いらっしゃいませ
姓名　大谷正康
房号　2411
到着日　24/6
出発日　28/6
.
.
.
.
Room Rate　70^{00}

図 1　問題の小片

図 1 に問題のルームナンバーを記入してあるカードを示す．「いらっしゃいませ」と日本語で親切に書いてある．「食事の時はこれを示して下さい」と一言いってくれればよいのにと 3 人ボヤクことボヤクこと．

迎えに来てくれた張先生に確認してもらったところ，このホテルは団体客が多く，個人宿泊者かどうか確認するために，この小片が必要であるとのことであった．

翌朝は黄門ならぬ「これが目にはいらぬか」とばかりカードを示す．ウェイトレスにっこり笑って席に案内される．

またまた失敗がおこった．

早速ウェイトレスがきて，「コーヒー or チー？」というので「チー・プリーズ」と答えると紅茶がつがれる．稲葉室長が中国白粥（9 元）と卵 1 個のスクランブル（7 元）を流暢な中国語の発音で注文．まず最初に各人に 2 切れのトーストが運ばれてきた．室長「これは注文していない」（英語）と言っても，何かいってテーブルに置いて去る．行動派の室長がマスターのところへ．ところがこのスクランブルにはトーストが含まれているとの御託宣．同室長ガックリ．

支払明細書を見ていた田部部長，稲葉室長が「これは何だ？」と覗き込む．そこには「チー 7.5 元」が印刷されているではないか．茶はてっきり無料と思っていた．そういえば一寸立派な容器だった．よく考えてみればこのレストランは本来コーヒーショップであったのだ．

安い朝食を期待していたのに 23.5 元（+15% サービス料）でお茶代の割合 30% 強．次の日は，茶もオーダーせず中国粥とキューリの酢づけの朝食．

物事が分かり始めて賢くなったころにはホテルを離れ次の予定へ出発．失敗の連続のホテルでの朝食であった．